

# TOEFL-ITPとSILL及び英検CAN-DO Listsを用いた 英語学力と学習ストラテジー及び学習意識から見た 一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究 (2014)

A Cross-Sectional Study on the Differences Between General Students and  
Returnees in Terms of English Proficiency and Learning Strategies and  
Consciousness of Learning Using the TOEFL-ITP, the SILL and  
The EIKEN CAN-DO Lists  
(2014)

木村松雄

Matsuo KIMURA

遠藤健治

Kenji ENDO

## I. 研究目的

近年多様化の一途にある学生の背景と英語学力、学習意識、用いる学習ストラテジーの関係を入学前に海外生活体験をもつ帰国生と海外生活体験をもたない一般学生の相違点に着目し、これを客観的に捉える。これにより、教育改革の中で今後ますます重視されるコミュニケーション能力の育成を通じた生涯学習の源となる「自己教育力」の育成に繋がる大学及び、小学校、中学校、高等学校の英語教育の改善への道を探る。本研究の根底には、学習意識が学習ストラテジーを規定し、その結果が英語学力に影響を及ぼすであろうという仮説があり、海外生活体験をもつ帰国生と海外生活体験をもたない一般学生との間に如何なる相違が存在するかを探るものである。どのような意識が、どのようなストラテジー使用を促し、その結果どのような特徴をもった学力を形成するかに最大の関心がある。最終的な目標は、日本で育つ学習ストラテジーと海外生活（異文化）体験をしないと育ちにくい学習ストラテジーの相違を明らかにすることとその教育的応用に関する提案である。

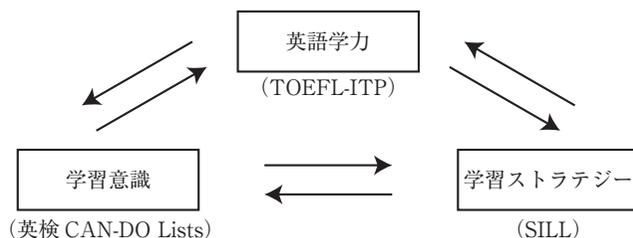


図1

## II. 研究の意義

直接的には、特定の学習集団（入学直後の英米文学科1年生）の英語学力（TOEFL-ITP）、学習背景、学習意識（英検 CAN-DO Lists: 準1級（短大終了時）+ 1級（大学4年生終了時）、用いる学習ストラテジー（SILL: The Strategy Inventory for Language Learning (1990)）の相互の関係の把握にある。間接的には、得られた研究成果が、学内外における今後の学習者を中心とした英語教育開発への示唆に、さらには、教育改革下にある小学校、中学校、高等学校、海外の日本人学校、とりわけ、一貫性を制度とした英語教育構想を持っている全国の小中一貫校、中高一貫校、小中高一貫校へは、国際化、グローバル化の中にあつてますますその数を増やしつつある異なる文化背景をもつ学習者の環境と発達に視点をおいた新たな教育理念や教育方針への示唆に、そして真に自立した学習者を育成するための一貫制英語教育を構想する際の示唆になり得る点にあると考える。因みに、文部科学省の基本プラン上の中高一貫校の数は500に及ぶ。2013年10月現在の全国公立の小中一貫校の総数は東京都の18校を筆頭に100校に及んでおり、毎年その数を増やしていくことが想定される。また文部科学省は、英語学力向上のため、小学校英語の開始時期を現行の5年生から3、4年生に早める方針を決定し、現在実現に向けての策定作業に入っている。正式教科ではない現状（「外国語活動」）を改めて、5、6年生は「教科」とし、授業時間数も週1コマから3コマに増やすという。教科化することで、検定教科書を無償配布し、現在行われていない成績評価は数値化することになるという。実現のためには、授業時数の確保、教員の確保、専任英語教員の養成と免許法の改正（初等英語教員免許（仮））の創設）等が大きな課題となる。とりわけ専任英語教員の養成は重要であると考えられるが、国は果たしてどのような具体的な政策を打ち出してくるのであろうか。いずれにせよ、明治以降中学校から開始されてきた日本の英語教育が小学校から始まるわけであり、小中の接続、中高の接続がこれまで以上に重要になってくる。一方でグローバル化の中で背景のことなる学習者の増加は今後一層顕著になっていくことが想定され、小中高を一貫した一貫制英語教育構想を実現するためには、大学での高等教育における英語教育の姿を想定した国際的に通用する各段階での到達度の設定が必要になってくる。肝心なのは、それらのものが系統性をもって学習者中心に

ならなければ本来的な外国語学習理論の構築は難しく、競争原理から協調原理への移行は起こりにくいであろう。グローバル化の中、異なる背景をもつ学習者の環境と発達に視点をおいた本研究の存在意義が問われるところである。

### III. 第2言語習得研究における学習ストラテジーの位置

Faerch & Kasper (1983) においては、第2言語習得を目指す学習者には2種類の知識があるという。即ち、「宣言的知識 (Declarative Knowledge)」と「手続き的知識 (Procedural Knowledge)」である。「宣言的知識」は、「知る・理解する知識」で、内在化して自分のものにした第2言語のルールと記憶された言語のチャンクからなる知識であり、説明の対象となる。これに対して「手続き的知識」は「使う知識」であり、第2言語の習得や使用のために、第2言語のデータを処理する際に用いるストラテジーやその手順などについての知識である。因みに筆者は、スキーに関しては、「宣言的知識」はあるが「手続き的知識」はなく、自転車に関しては、「手続き的知識」はあるが、「宣言的知識」はない。幼児期に自然環境下で外国語を習得した場合、「手続き的知識」は身に付けても、「宣言的知識」を身につける可能性は概して低いと言えよう。反対に、日本がこれまで行ってきたような学習・研究の対象としての英語教育は、「宣言的知識」は身に付けても、コミュニケーション能力に繋がるような「手続き的知識」を身に付ける可能性は低いと言えよう。外国語である英語をコミュニケーションの伝達手段にするためには、「宣言的知識」のみならず「手続き的知識」が不可欠であることを確認しておきたい。さて、「手続き的知識」は、さらに「社会プロセス (Social Process)」と「認知プロセス (Cognitive Process)」に枝分かれする。「社会プロセス」は、相互交渉の機会を処理する際に、学習者が使用する様々な行動的なストラテジーから成るプロセスを意味する。「認知プロセス」は、学習者が第2言語のルールを蓄積したり内在化したりする際の精神的なプロセスを意味する。さらに、「認知プロセス」は、「学習プロセス (Learning Process)」と「使用プロセス (Using Process)」に分かれる。「学習プロセス」においては、学習者は、現在の知識と新たなインプットを用いて、新しい第2言語のルールを自動化する。「使用プロセス」は、さらに「産出・受容ストラテジー (Production/Reception Strategies)」と「コミュニケーション・ストラテジー (Communication Strategies)」に2分化する。「産出・受容ストラテジー」(Tarone:1981) は、学習者が現在持っている第2言語の知識を有効かつ最小限の努力によって使用する時に用いるストラテジーを指す。これに対して「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーションを持続・継続しようとする時に用いるストラテジーであり、補償的な働きをするものであるところから、時として「補償ストラテジー (Compensation Strategies)」を意味することもある。

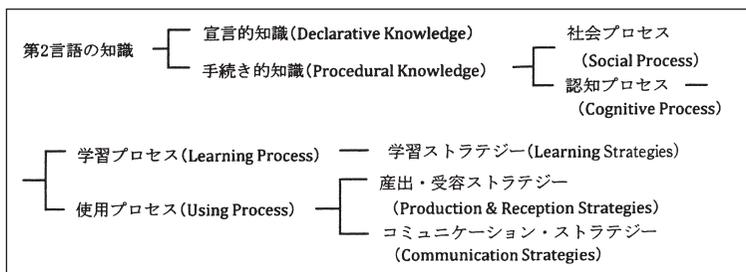


図2

さて、学習プロセスを司る「学習ストラテジー」は、総じて、学習者がどのようにして第2言語の知識を蓄積し、さらに蓄積した知識を、どのようにして自動化するに関わる法則と考えられている。よって、「学習ストラテジー」は、使用プロセスを司る「コミュニケーション・ストラテジー」や「産出・受容ストラテジー」とは対照的な存在と言えよう。端的に言えば、「学習ストラテジー」は、第2言語を学習し獲得するためのストラテジーであり、一方、「コミュニケーション・ストラテジー」や「産出・受容ストラテジー」は、第2言語を使用するために用いるストラテジーであると言えよう。因みに「学習ストラテジー」は心理学に基礎を置き、「コミュニケーション・ストラテジー」は、コミュニケーション学に基礎を置いている。どちらも認知プロセスを形成する重要なプロセスであるが、言語の持つ概念やルールを記憶したり、一般化したりすることは、およそ全て「学習ストラテジー」によって行われるため、教授・学習レベルにおいては、まず「学習ストラテジー」の習得及び開発が重要な課題であると言えよう。基本的な「コミュニケーション・ストラテジー」は、学習内容に含まれるタスク（課題）の設定及び難易度の調整によって対応が可能と考えられる。因みにこれまでの本研究の成果として、Successful Learners（学習に成功する学習者）が目的に応じて使用する「メタ認知ストラテジー（Meta-cognitive Strategies）」を英米文学科の学生は海外生活経験の有無に拘らずよく使用することと、さらに英語力が高度化し自動化の域に達したと考えられる学習者の多くは、意識的な学習方法は概して採らず、その結果使用する学習ストラテジーの数も少なくなることが判明している。大学教養課程においても、あるいは、後期中等教育課程においても、EGP（English for General Purposes）からESP（English for Specific/Special Purposes）への比重移動の必要性が出てきていると考えられる。

#### IV. 研究方法

分析対象は、2014年度に入学した英米文学科学生のうち、下記測定への回答が得られた303名（男性72名、女性231名）。海外生活経験については、その期間が0ヶ月を「なし群」、1～23ヶ月を「短期群」、24ヶ月以上を「長期群」とすると、各群の人数は、なし群男性54名、なし群女性163名、短期群男性7名、短期群女性24名、長期群男性11名、長期群女性44名、計なし群217名、短期群31名、長期群55名となっている。昨年度よりも回答者総数は多いが、海外経験者数は昨年度の総計で104名のところ本年度は86名と少なくなっている。

従属変数は、英語学力を測定するものとしてTOEFL-ITPを実施し、その3つの下位得点（Listening、Structure、Reading）および得点（Total）の4変数を使った。配点は、Listening 68点、Structure 68点、Reading 67点、Total 677点（ $((\text{Listening} + \text{Structure} + \text{Reading}) \times 10) \div 3$ ）である。

英語学習のために使用しているストラテジーを測定するためには、木村・遠藤（2010;2011;2012;2013）と同様にOxford（1990）の開発したSILLの日本語版を一部変更して実施した。評価は「全く違う」～「全くその通り」の5段階とした。

大学入学時に「どのような英語技能にどれだけの自信を持っているか」を調査するために、英検CAN-DO list42項目を用いた。評価は、ストラテジーと同様に「全く違う」～「全くその通り」の5段階とした。

以上の測定は、年度初頭に履修手続きの一環として行われた。

#### V. 結果と考察

##### 1. 英語学力について

まず、全体303名の結果の基礎統計量を求めると、Listeningでは最低点32、最高点68、平均値47.93、標準偏差5.99、歪度0.89、尖度0.482、Structureでは最低点36、最高点64、平均値49.54、標準偏差4.81、歪度0.02、尖度0.05、Readingでは最低点33、最高点64、平均値49.46、標準偏差4.38、歪度-0.40、尖度1.247、TOTALでは最低点377、最高点617、平均値489.72、標準偏差42.98、歪度0.39、尖度0.08となった。

海外生活期間と性別によって分割した群ごとに、平均得点を求めると表1が得られる。すべての得点において有意な性差は見られなかった。男性の人数が少ないために差が検出されにくいと考えられる。海外生活期間に関しては、すべての得点において海外生活期間の効

果が顕著に表れており、Listening、Structure、Totalでは、なし群より短期群の得点が高く、短期群よりも長期群の得点がそれぞれ有意に高くなっている。Readingでもなし群よりも長期群の方が得点が高くなっている。日常生活の中のコミュニケーションで使用せざるを得ないListeningの得点において海外生活期間が長いほど高得点を獲得しているだけでなく、StructureやReadingにおいても海外生活期間が長いほど得点が高いのは興味深い結果である。生活の中で、構造や意味を読み取る学習も進行していたものと推測される。

表1.TOEFLの結果の基礎統計量と有意差検定

対象		Listening		Structure		Reading		Total	
性別	海外生活経	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
男性	なし群	45.5	3.92	50.3	4.34	50.4	4.08	487.1	32.70
	短期群	50.3	5.19	50.1	5.98	50.4	3.74	502.7	46.50
	長期群	55.6	4.25	54.5	3.80	53.1	2.30	543.9	25.83
	総和	47.5	5.52	50.9	4.62	50.8	3.92	497.3	38.64
女性	なし群	45.6	3.81	48.1	4.31	48.2	4.09	473.0	33.04
	短期群	50.0	5.92	49.7	4.64	50.2	4.32	499.5	42.23
	長期群	56.1	6.01	52.5	5.07	51.5	4.78	533.8	47.42
	総和	48.1	6.13	49.1	4.79	49.0	4.44	487.4	44.05
総和	なし群	45.6	3.83	48.7	4.41	48.7	4.18	476.5	33.44
	短期群	50.1	5.68	49.8	4.87	50.2	4.14	500.3	42.44
	長期群	56.0	5.67	52.9	4.88	51.8	4.43	535.8	43.94
	総和	47.9	5.99	49.5	4.81	49.5	4.38	489.7	42.98
性別の主効果 (df1=1,df2=297)		性差なし F=0.022, n.s.		性差なし F=3.379, n.s.		性差なし F=2.828, n.s.		性差なし F=1.768, n.s.	
海外生活期間の主効果 (df1=2, df2=297)		なし<短期<長期 F=82.065, p<.001		なし=短期<長期 F=12.982, p<.001		なし<長期 F=7.790, p<.001		なし<短期<長期 F=38.778, p<.001	

## 2. ストラテジーの使用について

### 2-1. 基礎統計量

ストラテジーについては、各回答の「全く違う」を1点～「全くその通り」を5点と得点化した。測度としては、まず全52項目の評定値を求める。次にOxfordの主唱する記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会的ストラテジーの6つの方略カテゴリーの得点を算出する。さらに木村・遠藤(2010)では、同項目の因子分析により7つの学習方略因子を抽出しており、日本人の英語学習を説明するにはOxfordのカテゴリーよりも適していると考えられるので、これらの7因子の尺度得点を求めた。なお、7つの因子とは、「積極的に英語で会話を始める」「英語で質問する」「他の人と英語の練習をする」等の項目で因子負荷量が高い「英語を日常場面で使用する」第Ⅰ因子、「優れた英語学習者になるためにどうしたらよいか心掛ける」「スケジュールを立て英語の学習に十分時間をあてる」「英語の技能を高めるための明確な目標がある」で因子負荷量が高い“自覚的英語学習態度”の第Ⅱ因子、「間違いを恐れず英語を話すよう自分を励ます」「困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」

「話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらおう」等で因子負荷量が高い“補償的態度”の第Ⅲ因子、「単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける」「単語が使われる場を心に描いて新語を覚える」で因子負荷量が高い“単語記憶”の第Ⅳ因子、「英語の中にパターンを見つけようとする」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっているか気づく」「英語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す」で因子負荷量が高い“神経質な英語学習態度”の第Ⅴ因子、「英語で読むのが楽しい」「できるだけ英語で読む機会を探す」で因子負荷量が高い“能動的英語学習態度”の第Ⅵ因子、「英語を読むとき、一語一語調べない」「逐語訳はしないよう心掛ける」で負荷量が高い“概括的理解”の第Ⅶ因子である。また、木村・遠藤（2013）では、海外生活経験の長い者が最も使用する方略群と、最も使用しない方略群が識別された。そこで個人ごとに、前者に属する項目の平均値を求め“能動的英語学習態度”得点、後者に属する項目の平均値を求め“勉強的英語学習態度”得点とし、TOEFL得点との相関を求めたところ、“能動的英語学習態度”得点とすべてのTOEFL得点との間で有意な正の相関が得られ、“勉強的英語学習態度”得点とすべてのTOEFL得点との間で有意な負の相関が得られた。本研究でもこの2つの英語学習態度得点を算出し、測度に加えることとする（ただしこの名称は上記第Ⅵ因子の“能動的英語学習態度”と混同するので、以後“能動的英語使用態度”と表記し、“勉強的英語学習態度”も“勉強的態度”と表記する。また7因子の分析と区別して、“二極化した態度”として言及する）。“能動的英語使用態度”は「覚えやすいように文の中で新語を使う」「新語を身体で表現して覚える」「英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける」「知っている単語をいろいろな文脈で使う」「積極的に英語で会話を始める」「英語のラジオ・テレビ番組（NHK等）や英語の映画を見る」「英語で読み物を読むのが楽しい」「英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「逐語訳（一語一語訳す）はしないよう心掛ける」「読んだり聞いたりしたことを英語で要約する」「英語を読むとき、一語一語辞書で調べない」「他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける」「英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける」「間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」「他の人と英語を使う練習をよくする」「困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める」「英語で質問をよくする」で構成され、“勉強的態度”は「授業の復習をよくする」「英語の発音練習をする」「英語の中にパターンを見つけようとする」「他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける」「スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」「自分の英語学習の進歩について考える」「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく」「自分の英語学習において、音読は重要だと思う」「辞書をよく引く」「自分で考えた英語ノートを活用する」で構成される。

これらの測度についてそれぞれ平均評定値を求めた結果を表2に示す。

まず項目ごとの平均値を見ると、平均値が4.00を越えるものが10項目上げられる。「英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う(4.46)」「自分の英語学習において、音読は重要だと思う(4.39)」「知らない語を理解しようと推測する(4.26)」「他の人が英語を使っているときは、集中して聞く(4.25)」「自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する(4.17)」「英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ(4.15)」「新語は数回書いたり言ったりする(4.07)」「英語での会話中、適切な語が思いつかないとき、ジェスチャーを使う(4.06)」「英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける(4.05)」「優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける(4.01)」で、昨年度と同様の結果である。これらは特に頻繁に使用する方略であろうが、[平均値+標準偏差]の値が5.00を越え天井効果が疑われ、歪度・尖度も高く正規分布からはほど遠い。とりわけ「英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う」や「自分の英語学習において、音読は重要だと思う」は中央値、最頻値がともに5で、分布の偏りが著しく、方略使用の個人差を記述するには不適当な項目である。一方平均値が2.5未満で著しく使用頻度の低いと思われる項目として「英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る(2.15)」「新語を身体で表現して覚える(2.27)」「英語で質問をよくする(2.49)」があげられる。日常生活での英語使用が身につけていないことの表れであろう。

6つの方略カテゴリーの得点では、メタ認知ストラテジー(3.79)、補償ストラテジー(3.63)、認知ストラテジー(3.45)、情意ストラテジー(3.22)、社会ストラテジー(3.18)、記憶ストラテジー(3.12)となり、この順番は2011～2013年度で一貫している。相対的にはメタ認知や補償がよく使われており、情意、社会、記憶は中程度の使用に留まっている。

7因子の得点では、“概括的理解(3.86)”、“自覚的英語学習態度(3.73)”、“能動的英語学習態度(3.67)”、“単語記憶(3.28)”、“補償的態度(3.26)”、“神経質な英語学習態度(3.21)”、“英語を日常場面で使用する(3.05)”の順となった。英語学習に取り組む態度が重視されている様子がうかがえる。一方、“英語を日常場面で使用する”はほぼ中間程度の得点で、ここでも生活の中に生きた英語は入り込んでいない状況が推測される。

さらに二極化した態度では、“勉強的態度”が3.63、“能動的英語使用態度”が3.20となった。やはり頻度に勉強>使用という差が現れている。

表2.SILLの回答結果

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度
1. 英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える。	3.59	1.00	4.00	3	-.39	-.10
2. 覚えやすいように文の中で新語を使う。	3.14	1.17	3.00	2	.03	-.96
3. 単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける。	3.64	1.18	4.00	4	-.58	-.52
4. 単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える。	3.39	1.22	4.00	4	-.34	-.83
5. 新語を覚えるときには韻を使う。	2.80	1.25	3.00	2	.24	-.93
6. 新語を覚えるときに単語カードなどを使う。	2.79	1.42	3.00	1	.20	-1.26
7. 新語を身体で表現して覚える。	2.27	1.18	2.00	2	.73	-.37
8. 授業の復習をよくする。	3.21	1.07	3.00	3	-.03	-.53
9. 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく。	3.27	1.24	3.00	4	-.26	-.92
10. 新語は数回書いたり言ったりする。	4.07	1.07	4.00	5	-1.09	.53
11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける。	4.05	1.06	4.00	5	-.92	.04
12. 英語の発音練習をする。	3.87	1.12	4.00	5	-.78	-.19
13. 知っている単語をいろいろな文脈で使う。	3.50	1.00	3.50	3	-.21	-.50
14. 積極的に英語で会話を始める。	3.08	1.23	3.00	3	.10	-.96
15. 英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る。	3.85	1.20	4.00	5	-.73	-.56
16. 英語で読み物を読むのが楽しい。	3.64	1.11	4.00	4	-.47	-.50
17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く。	2.95	1.25	3.00	3	.10	-.98
18. 英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む。	3.07	1.21	3.00	2	.12	-.97
19. 英語の新語に似た語を日本語の中に探す。	2.69	1.13	3.00	2	.34	-.65
20. 英語の中にパターンを見つけてようとする。	3.36	1.10	4.00	4	-.41	-.50
21. 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。	3.57	1.19	4.00	4	-.62	-.52
22. 逐語訳(一語一語訳)はしないよう心掛ける。	3.93	1.08	4.00	5	-.76	-.22
23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する。	2.64	1.12	3.00	2	.41	-.44
24. 知らない語を理解しようとする。	4.26	0.78	4.00	5	-.83	-.39
25. 英語での会話中、適切な語が思い浮かばないとき、ジェスチャーを使う。	4.06	0.98	4.00	5	-.92	-.38
26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る。	2.15	1.20	2.00	1	.84	-.31
27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない。	3.79	1.10	4.00	5	-.58	-.53
28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようとする。	3.04	1.18	3.00	3	.03	-.89
29. 英語の単語が思い浮かばないとき、同じ意味を持つ語や句を使う。	4.46	0.76	5.00	5	-1.46	2.01
30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける。	3.62	1.00	4.00	3	-.29	-.39
31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようとする。	4.17	0.77	4.00	4	-.57	-.36
32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く。	4.25	0.89	4.00	5	-1.25	1.32
33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける。	4.01	0.92	4.00	5	-.55	-.40
34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる。	3.39	1.03	3.00	3	-.08	-.58
35. 英語で話しかけることのできる人を探すよう心掛ける。	3.29	1.24	3.00	3	-.15	-1.02
36. できるだけ英語で読む機会を探す。	3.70	1.09	4.00	4	-.56	-.40
37. 英語の技能を高めるための明確な目標を持つている。	3.79	1.01	4.00	4	-.50	-.37
38. 自分の英語学習の進歩について考える。	3.93	0.96	4.00	4	-.66	-.07
39. 英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスするよう心掛ける。	3.05	1.07	3.00	3	.19	-.55
40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける。	3.29	1.14	3.00	4	-.10	-.91
41. うまくいったとき、自分をほめる。	3.47	1.16	4.00	4	-.44	-.56
42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく。	3.06	1.33	3.00	2	-.01	-1.21
43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらったか。	4.15	0.97	4.00	5	-1.23	1.40
44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらって。	3.20	1.24	3.00	3	-.10	-.96
45. 他の人と英語を使う練習をよくする。	2.54	1.13	2.00	2	.50	-.48
46. 困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。	2.96	1.28	3.00	3	.07	-1.06
47. 英語で質問をよくする。	2.49	1.13	2.00	2	.58	-.27
48. 英語話者の文化を学ぶよう心掛ける。	3.73	1.08	4.00	4	-.62	-.22
49. 特定の日本人の英語の熟達者を意識している。	3.15	1.35	3.00	4	-.14	-1.18
50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う。	4.39	0.97	5.00	5	-1.63	1.98
51. 辞書をよく引く。	3.71	1.09	4.00	4	-.66	-.11
52. 自分で考えた英語ノートを活用する。	2.79	1.31	3.00	3	.19	-1.06
記憶ストラテジー	3.12	0.59	3.11		-.15	.50
認知ストラテジー	3.45	0.54	3.43		-.06	-.03
補償ストラテジー	3.63	0.55	3.67		-.23	.13
メタ認知ストラテジー	3.79	0.67	3.78		-.30	-.14
情意ストラテジー	3.22	0.74	3.25		-.02	-.24
社会ストラテジー	3.18	0.76	3.17		-.06	-.14
英語を日常場面で使用する	3.05	0.69	2.90		.13	-.34
自覚的英語学習態度	3.73	0.66	3.75		-.27	-.11
補償的態度	3.26	0.79	3.25		.05	-.25
単語記憶	3.28	0.90	3.33		-.15	-.31
神経質な英語学習態度	3.21	0.78	3.33		-.22	-.02
能動的英語学習態度	3.67	0.96	3.50		-.48	-.38
概括的理解	3.86	0.89	4.00		-.41	-.66
能動的英語使用態度	3.20	0.65	3.18		.22	-.37
勉強的態度	3.63	0.59	3.64		-.37	.14

## 2-2. 海外生活経験とストラテジーの使用

各ストラテジーの評定値に関し、海外生活経験の期間(なし群、短期群、長期群)×性別(男性、女性)の2要因分散分析を行ったところ(各平均値、標準偏差、F値は付表1に示す)、海外生活期間の主効果が52項目中15項目で認められた。TukeyのWSD検定により多重比較を行った結果、群間の相違が明らかかなものをあげると、まず、①長期群もしくは長

期群と短期群の両群が、なし群よりも多く使用する項目として「11. 英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける」「14. 積極的に英語で会話を始める」「15. 英語のラジオ・テレビ番組（NHK等）や英語の映画を見る」「17. 英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く」「40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける」「45. 他の人と英語を使う練習をよくする」の6項目があげられる。海外生活を経験していない学生は、生活の中で積極的に英語を使用していないようである。②逆に、長期群がなし群よりも使用しない項目としては「19. 英語の新語に似た語を日本語の中を探す」「20. 英語の中にパターンを見つけようとする」の2項目があげられる。構造的に英語を理解しようという態度で、海外生活未経験者は英語を外国語として対象化している様子がうかがえる。また長期群がなし群、短期群両群よりも使用しない項目として「34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる」と「50. 自分の英語学習において、音読は重要だと思う」があげられる。これも英語を勉強しようという意識を表象した方略で、海外生活体験をもたない多くの日本人学習者にとっては、意味的、構造的に理解した文を正確に流暢に音読することで、音韻・語彙・統語の体系が習得されるため、不可欠なものであるが、長期群が最も使用しない方略でもあり、acquisition（習得）とlearning（学習）を同次元で扱う時には注意を要する。③短期群の使用程度が最も高い項目として「2. 覚えやすいように文の中で新語を使う」「37. 英語の技能を高めるための明確な目標を持っている」「42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく」「43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ」「49. 特定の日本人の英語の熟達者を意識している」の5項目があげられる。英語使用が日常化するまでの過渡的な学習方略の可能性はある。

Oxfordのカテゴリーでは海外生活期間の主効果が有意なものではなかった。7つの因子得点では、“英語を日常場面で使用する”で海外生活期間の主効果が認められ、なし群<短期群、長期群という得点差が検出された。当然のことながら、海外生活経験者は英語を生活の中で使用しているわけである。二極化した態度では海外生活経験者と未経験者との相違はより明確に表れた。“能動的英語使用態度”と“勉強的態度”の双方で海外生活期間の主効果が認められ、“能動的英語使用態度”ではなし群<短期群、長期群という差が、“勉強的態度”では長期群<なし群、短期群という差が検出された。海外生活経験の長い者は、英語を勉強するのではなく、使うのである。

性別の主効果は「4. 単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える」「9. 新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく」「22. 難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする」「32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く」「43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらうか、もう一度言ってもらうかたのむ」「44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもら

う」の6項目で検出された。いずれも女性の方が男性より使用していた。カテゴリー、7つの因子得点、二極化した態度では有意な性別の主効果はまったく得られなかった。性別による顕著な傾向は見られない。

### 2-3. ストラテジーの使用と英語学力

方略の使用がTOEFLの得点を予測しうるかを重回帰分析（ステップワイズ法）によって検討した。カテゴリー、7つの因子、二極化した態度ごとに方略使用の得点を説明変数、英語得点 Listening 得点、Structure 得点、Reading 得点、Total 得点のそれぞれを従属変数とした。

まず6カテゴリーの得点を説明変数とした場合、Listening を目的変数とすると、認知、記憶、社会、メタ認知、補償の得点を説明変数として投入したモデルで、 $R=.450$  ( $R^2=.20$ )、 $p<.001$  となった。標準化 $\beta$ 係数は認知 (.393)、記憶 (-.270)、社会 (.199)、メタ認知 (-.218)、補償 (.140) で、認知と社会、補償の $\beta$ 係数は正だが、メタ認知と記憶は負になっている。Structure を目的変数とした場合は、補償と情意、メタ認知を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた ( $R=.276$ ,  $R^2=.08$ ,  $p<.001$ )。ただし、決定係数はかなり小さい。標準化 $\beta$ 係数は補償 (.165)、情意 (-.189)、メタ認知 (.174) で、ここでも $\beta$ 係数は補償で小さいながらも正となっている。Reading を目的変数とした場合では、認知と記憶を説明変数としたモデルが得られたが、これも決定係数は極めて小さい ( $R=.259$ ,  $R^2=.07$ ,  $p<.001$ )。標準化 $\beta$ 係数は認知 (.310)、記憶 (-.194) であった。Listening と同様に、記憶の $\beta$ 係数が負となっている。Total を目的変数とした場合、認知、記憶、補償を説明変数としたモデルが有意であった ( $R=.358$ ,  $R^2=.13$ ,  $p<.001$ )。標準化 $\beta$ 係数は認知 (.335)、記憶 (-.240)、補償 (.129) となった。概して認知と補償が正の $\beta$ 係数、記憶が負の $\beta$ 係数となっている。

7つの因子得点を説明変数とした分析では、Listening を目的変数とすると、“英語を日常場面で使用する”、“自覚的英語学習態度”、“神経質な英語学習態度”、“概括的理解”の得点を説明変数として投入したモデルで、 $R=.537$  ( $R^2=.29$ )、 $p<.001$  となった。標準化 $\beta$ 係数は“英語を日常場面で使用する” (.601)、“自覚的英語学習態度” (-.285)、“神経質な英語学習態度” (-.171)、“概括的理解” (.123) で、“英語を日常場面で使用する”と“概括的理解”の $\beta$ 係数は正だが、“自覚的英語学習態度”と“神経質な英語学習態度”は負になっている。Structure を目的変数とした場合は、“概括的理解”、“英語を日常場面で使用する”、“神経質な英語学習態度”を説明変数としたモデルで有意な重相関係数が得られた ( $R=.315$ ,  $R^2=.10$ ,  $p<.001$ )。カテゴリーの時と同様、決定係数は小さい。標準化 $\beta$ 係数は“概括的理解” (.219)、“英語を日常場面で使用する” (.170)、“神経質な英語学習態度” (-.131) であった。Reading を目的変数とした場合では、“英語を日常場面で使用する”、

“概括的理解”、“神経質な英語学習態度”、“能動的英語学習態度”を説明変数としたモデルが得られたが、これも決定係数は小さい ( $R=.328$ ,  $R^2=.11$ ,  $p<.001$ )。標準化  $\beta$  係数は“英語を日常場面で使用する (.168)”、“概括的理解 (.144)”、“神経質な英語学習態度 (-.146)”、“能動的英語学習態度 (.133)”であった。Total を目的変数とした場合、“英語を日常場面で使用する”、“神経質な英語学習態度”、“概括的理解”、“自覚的英語学習態度”を説明変数としたモデルが有意であった ( $R=.453$ ,  $R^2=.21$ ,  $p<.001$ )。標準化  $\beta$  係数は“英語を日常場面で使用する (.428)”、“神経質な英語学習態度 (-.175)”、“概括的理解 (.191)”、“自覚的英語学習態度 (-.148)”となった。総合すると、「積極的に英語で会話を始める」「英語で質問する」「他の人と英語の練習をする」等の“英語を日常で使用する”と「英語を読むとき、一語一語調べない」「逐語訳はしないよう心掛ける」の“概括的理解”の得点が高いほど TOEFL の得点は高くなり、「英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっているか気づく」「英語を勉強しているとき、自分がどう感じているか他の人に話す」等の“神経質な英語学習態度”の得点が高いほど TOEFL 得点は低くなる。「スケジュールを立て英語の学習に十分時間をあてる」「英語の技能を高めるための明確な目標がある」等の“自覚的英語学習態度”もやや同様に負の傾向が見られる。大雑把にでも英語を使用しようという方略を用いるほど英語得点は高く、英語を『真面目に』勉強しようとするほど英語得点は低くなる傾向が得られたわけである。

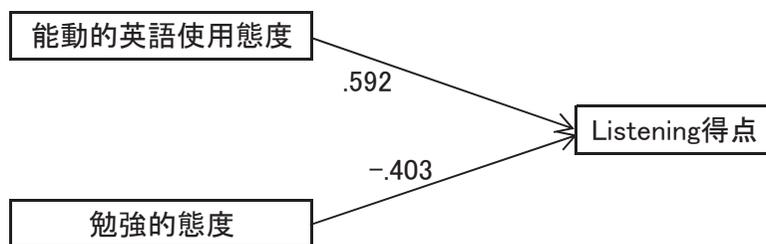


図3. 使用方略と英語得点のパス図

二極化された態度では、Listening を目的変数とした場合、 $R=.579$ ,  $R^2=.34$ ,  $p<.001$  となり、“能動的英語使用態度”の標準化  $\beta$  係数は .592、“勉強的態度”の標準化  $\beta$  係数は -.403 となった。Structure を目的変数とした場合は、 $R=.278$ ,  $R^2=.08$ ,  $p<.001$ 、“能動的英語使用態度 ( $\beta =.289$ )”、“勉強的態度 ( $\beta =-.181$ )”、Reading を目的変数とした場合は、 $R=.267$ ,  $R^2=.07$ ,  $p<.001$ 、“能動的英語使用態度 ( $\beta =.287$ )”、“勉強的態度 ( $\beta =-.135$ )”、Total を目的変数とした場合、 $R=.462$ ,  $R^2=.21$ ,  $p<.001$ 、“能動的英語学習態度 ( $\beta =.481$ )”、“勉強的態度 ( $\beta =-.301$ )”となり、すべて“能動的英語使用態度”は正、“勉強的態度”は負の  $\beta$  係数が得られた。ここでも、“勉強”しようとするほど逆説的に英語得点

は下がると予測される。

説明変数としては、Oxfordの6カテゴリ得点よりは、7つの因子得点や二極化された態度得点の方があてはまりが良さそうである。

技能について見てみると、Listeningについては決定係数は.2～.34程度の値が得られたが、StructureやReadingの決定係数は.10前後で、Listeningよりもさらに方略による予測が難しいと思われる。

### 3. 英語学習効力感 (CAN-DO) について

#### 3-1. 海外生活経験と CAN-DO

CAN-DOの設問に対する回答の「全く違う」を1点～「全くその通り」を5点と得点化し、各項目の平均値を求めた(基礎統計量を表3に示す)。4.00を越える項目は皆無で、「56. 公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる」「57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる」「86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる」「87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど)」「88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる。(留学の志望動機など)」が3.5以上になっている程度で概して効力感は高くない。一方、2.50に満たないような極端に得点の低い項目は「72. 会議に参加してやりとりをすることができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)」「73. 幅広い内容について、電話で交渉することができる。(予定の変更、値段の交渉など)」だけであるが、この項目は日本人学生には母語の日本語でも高い得点は獲得できないであろう。総体としては、英語のできる程度は「ふつう」であると見なしているようである。もともとリストには日本国内において、これができないと困るような行動項目は含まれていないため、高得点は期待できない。

各得点を従属変数として、海外生活経験の期間(なし群、短期群、長期群)×性別(男性、女性)の2要因分散分析を行った(各平均値、標準偏差、*F*値を付表2に示す)。海外生活期間の主効果は42項目中37項目で認められた。なし群<短期群<長期群、なし群<短期群・長期群、なし群・短期群<長期群、なし群<長期群と、短期群の位置により幾つかのパターンが見られるが、なし群<長期群という差は一貫して見られている。各項目をListening準1級レベル、Listening 1級レベル、Listening Totalと技能とレベルでまとめて得点化した結果でも、全レベルで、なし群<長期群という差が認められている。昨年度同様、海外生活期間の長いものが英語効力感が高いという結果となった。

性別の主効果については、有意となった項目はまったくなかった。性別によって英語学習に関わる効力感が大きく影響を受けるとは言えないようである。

表3.CAN-DOの基礎統計量

項目	平均値	標準偏差	中央値	最頻値	歪度	尖度	
53. 興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(講演、講義など)	3.47	1.10	3.00	3	-.29	-.59	
54. テレビやラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる。	3.29	1.11	3.00	4	-.25	-.68	
55. 観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる。	3.42	1.12	4.00	4	-.43	-.49	
56. 公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる。	3.87	0.99	4.00	4	-.68	-.03	
57. 交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる。	3.77	1.04	4.00	4	-.64	-.22	
58. 自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる。	2.95	1.18	3.00	3	.14	-.83	
59. 幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(一般教養的な講演や講義など)	2.88	1.09	3.00	3	.09	-.67	
60. 社会的な話題に関する話を理解することができる。(環境問題に関する講演など)	2.81	1.12	3.00	2	.16	-.74	
61. 会議に参加して、その内容を理解することができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	2.76	1.17	3.00	2	.22	-.81	
62. テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる。	2.68	1.07	3.00	2	.29	-.56	
63. いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる。	3.49	1.14	4.00	3	-.40	-.54	
64. 調べたことについて、まとまりのある話をすることができる。(課題の発表、プレゼンテーション)	2.92	1.10	3.00	3	.15	-.62	
65. 自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	2.77	1.07	3.00	3	.35	-.42	
66. 商品やサービスについて、苦情を言うことができる。(商品の故障、サービスの内容など)	2.53	1.16	2.00	2	.46	-.57	
67. 公共の施設で簡単な用を足すことができる。(外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)	3.31	1.22	3.00	3	-.17	-.94	
68. 病院などで健康状態を伝えることができる。	3.21	1.18	3.00	3	-.13	-.85	
69. 簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる。(歯医者や美容院の予約など)	3.28	1.24	3.00	3	-.16	-.102	
70. 読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べるができる。	3.05	1.15	3.00	3	.07	-.73	
71. 社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	2.57	1.06	2.00	2	.50	-.15	
72. 会議に参加してやりとりをすることができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	2.46	1.12	2.00	2	.59	-.23	
73. 幅広い内容について、電話で交渉することができる。(予定の変更、値段の交渉など)	2.41	1.17	2.00	2	.70	-.25	
74. 相手の状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けすることができる。	2.81	1.25	3.00	2	.24	-.96	
75. 英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる。(新聞をざっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しむながら読む)	3.32	1.06	3.00	3	-.17	-.61	
76. 英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる。(The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Timesなど)	3.00	1.06	3.00	3	-.04	-.51	
77. まとまった量の英文の要点を理解することができる。(講義や研修での課題図書や資料など)	3.05	1.03	3.00	3	-.08	-.44	
78. 仕事に関する手紙(Eメール)を理解することができる。	3.20	1.03	3.00	3	.00	-.52	
79. 商品の取り扱い説明書を理解することができる。(電化製品など)	3.27	1.08	3.00	3	-.12	-.55	
80. 雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる。(TIME/Newsweekなど)	3.12	1.04	3.00	3	.02	-.40	
81. 文学作品を理解することができる。(小説など)	3.12	1.07	3.00	3	-.02	-.53	
82. 資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる。(報告書、統計的な資料など)	2.87	1.03	3.00	3	.14	-.46	
83. 留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる。	2.91	1.12	3.00	3	.12	-.58	
84. 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる。(簡単なレシピ、器具の使い方など)	3.44	1.07	4.00	4	-.34	-.52	
85. 興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる。(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)	3.32	1.09	3.00	3	-.19	-.64	
86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる。	3.68	0.97	4.00	4	-.48	-.26	
87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど)	3.64	0.95	4.00	4	-.45	-.23	
88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる。(留学の志望動機など)	3.52	0.98	4.00	4	-.21	-.73	
89. 自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返事を書くことができる。	3.07	1.07	3.00	3	.07	-.56	
90. 社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる。(環境問題など)	2.92	1.01	3.00	3	.20	-.26	
91. 自分の行った調査について、まとまりのある文章を書くことができる。(レポート、報告書など)	2.95	1.03	3.00	3	.11	-.41	
92. 商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことができる。(商品の故障、サービス内容など)	2.61	1.05	2.00	2	.41	-.39	
93. 社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことができる。(社説や論文など)	2.69	0.94	3.00	3	.14	-.32	
94. 講義や会議の要点のメモをとることができる。	3.05	1.09	3.00	3	-.01	-.57	
Listening 準1級	3.46	0.90	3.50			-.42	.16
Listening 1級	2.92	0.96	3.00			-.01	-.62
Listening Total	3.21	0.89	3.18			-.18	-.28
Speaking 準1級	3.01	0.95	3.00			-.03	-.48
Speaking 1級	2.56	1.00	2.50			.50	-.22
Speaking Total	2.85	0.94	2.82			.18	-.36
Reading 準1級	3.17	0.85	3.20			-.07	-.04
Reading 1級	3.00	0.88	3.00			.02	-.20
Reading Total	3.09	0.82	3.11			-.07	.05
Writing 準1級	3.45	0.85	3.50			-.23	-.17
Writing 1級	2.84	0.85	2.80			.08	.02
Writing Total	3.17	0.81	3.18			-.09	-.13

### 3-2.CAN-DO と英語学力

技能とレベルごとの得点を説明変数、TOEFL-ITP の Listening 得点、Structure 得点、Reading 得点、Total 得点を従属変数としてステップワイズによる重回帰分析を行った。その結果、Listening では  $R=.591$ 、 $R^2=.35$ 、 $p<.001$  で、説明変数として Listening Total (標準化  $\beta$  係数 = .304)、Speaking 準 1 級 (.296)、Reading 準 1 級 (.228)、Writing 1 級 (-.196) を投入したモデルが有意であった。Structure では説明変数として Reading Total (.321) を投入したモデルが  $R=.321$ 、 $R^2=.10$ 、 $p<.001$  で有意であった。Reading でも  $R=.376$ 、 $R^2=.14$ 、 $p<.001$  で、有意なモデルが検出されたが、モデル式に投入された説明変

数は Reading 準 1 級 (.376) のみであった。Total では説明変数として Reading Total (.288)、Listening Total (.251) を投入したモデルが  $R=.494$ 、 $R^2=.24$ 、 $p<.001$  で、有意であった。決定係数は .10 ~ .35 と低い水準にとどまり、予測力は高いとは言えない。効力感が高くても、必ずしも TOEFL 得点の高さに裏打ちされているとは言いがたい。また、いずれのモデル式にも Reading 効力感が組み込まれていた。昨年度は Listening 効力感がモデル式に投入されることが多かったので、英語ができるという実感は「英語が聞き取れる」ことから得られている可能性が高いと考えられたが、今年度の結果からは、英語ができるという実感は「英語が読める」ことから得られていると考えられる。この相違については、今後データを累積することによって検討することが必要である。

### 3-3. ストラテジーと CAN-DO

方略の使用と効力感との関係を見るために、方略カテゴリーの得点と CAN-DO の 12 レベルとの間で正準相関分析を行った。その結果、第 1 正準変量の正準相関係数が .56 で 0.1% の水準で有意であった。標準化された構造ベクトルは方略カテゴリーに関しては記憶ストラテジー (.23)、認知ストラテジー (.85)、補償ストラテジー (.81)、メタ認知ストラテジー (.43)、情意ストラテジー (.30)、社会ストラテジー (.56) となり、CAN-DO の変量に関しては Listening 準 1 級 (.80)、Listening 1 級 (.63)、Listening Total (.75)、Speaking 準 1 級 (.73)、Speaking 1 級 (.63)、Speaking Total (.72)、Reading 準 1 級 (.84)、Reading 1 級 (.73)、Reading Total (.84)、Writing 準 1 級 (.79)、Writing 1 級 (.62)、Writing Total (.75) となった。方略では認知と補償の係数が高く、CAN-DO では一様に高い値であった。認知と補償方略を使用しているほど効力感も高い傾向がある。

関連を単純化するために、二極化された態度と CAN-DO との間でも正準相関分析を行った。その結果、第 1 正準変量の正準相関係数が .57 で 0.1% の水準で有意であった。標準化された構造ベクトルは能動的英語使用態度 (.96)、勉強的態度 (.10) となり、CAN-DO の変量に関しては Listening 準 1 級 (.81)、Listening 1 級 (.76)、Listening Total (.82)、Speaking 準 1 級 (.82)、Speaking 1 級 (.83)、Speaking Total (.85)、Reading 準 1 級 (.83)、Reading 1 級 (.76)、Reading Total (.85)、Writing 準 1 級 (.84)、Writing 1 級 (.73)、Writing Total (.84) となった。能動的英語使用態度が高いと効力感も全般的に高いという関係が見て取れる。

## VI. 課題

以下の課題及び提案の内容は、青山学院大学文学部『紀要』第 55 号 (2013) において記

した内容と重複する部分が多いことを初めに記しておきたい。

1. 入学時より英語学力において高い成績を出しながら伸び悩んでいる上位グループに属する学生（長期海外生活体験者等：男性；543.9（前年比：-15.6）、女性；533.8（前年比：-4））には、国際レベルにおいて言語能力をさらに向上できるようなカリキュラムの開発、専門領域（文学、語学、言語教育、コミュニケーション）との連動、英語を共通語として成り立つ専門科目群の創設等、EGP（English for General Purposes）教育から脱却し、ESP（English for Specific/Special Purposes）教育、さらには、EAP（English for Academic Purposes）教育へ転換していくことが今後のさらなる課題となろう。2013年度、将来構想委員会と英語科目検討委員会により提案された英語で行われる科目群を履修することで卒業要件単位を満たす案（EMI化）の実効性に期待をかけた。またその実現が困難な場合の原因の特定と解決の検討をすべきであると考え。

2. 1. と同時に、英語習得そのものに自信が持てない（自己効力感が低い）下位グループに属する学生には、その原因の特定を本研究調査の結果を生かして明らかにし、その上で問題解決に繋がる木目細かい学習支援を系統的かつ経年的に行う必要があるかと思う。

3. 大学における英語教育プログラムの中に、レベル別に基礎訓練を終えた学生を一定期間（3か月-6か月）英語使用国（英米加豪のみならずアジア諸国も含む）に留学させ、英語運用能力のみならず、グローバル化に対応する異文化間理解（=文化相対主義（Culture Relativism）：文化に優劣はないという普遍思想）の意識を高められるような本来的な外国語教育システムの構築を真剣に且つ緊急に検討すべき時期に入っていると考える。大学全体がグローバル化に対応し、 Semester制導入の実行を目前に控えた今こそ、外国の提携大学との単位の互換（Unit Credit System）を視野に入れた、英米文学科の学生に相応しい留学教育システムの検討が望まれる。

4. 大学教養課程における到達目標をCEFR（Common European Framework for Reference of Languages: Learning, Teaching, Assessment）やCEFRを日本の教育環境に合わせて策定されたCEFR-J等を参考にして準備する必要がある。上記1、2、3はこの全体枠の中で処理することになる。CEFRの中核理念は、複言語主義（plurilingualism）・複文化主義（pluriculturalism）及び行動中心主義にあると言われる。行動中心主義は、言語能力を単なる言語知識としてではなく、特定の場面でどのような課題に対処できるかで言語能力を判断する立場で示す。CEFRは、言語教育政策全般を包括的に論じているが、とりわけ世界的に注目を集めているのは、言語熟達度を測定するための共通参照レベル（Common

Reference Levels) である。国際化・グローバル化を正面から議論するのであれば、これから行う言語教育を世界レベルで評価するシステムを準備しなくてはならないであろう。本研究で用いている日本英語検定協会のCAN-DO Listsも基本的にはCEFRに基本理念を置いて作成されている。また2013年度より文部科学省の指導により、全国の中学校・高等学校は到達度目標を策定した外国語(英語)教育を行うことが確定し、各自治体は学習指導要領の理念を具現化した到達度目標の設定を行っている。また文部科学省は、II. 研究の意義で触れたように、英語学力向上のため、小学校英語の開始時期を5年生から3年生に早め、さらに正式教科ではない現状(「外国語活動」)を改めて、5、6年生には正規の「教科」とし、授業時間数も現行週1コマから3コマ(分)に増やす計画であるという。教科化することで、検定教科書が現れ、現在行われていない成績評価を数値化することにもなるという。恐らくこの後は、先行している中学校・高等学校の到達目標に向かう小学校英語教育の到達度目標の策定が行なわれ、小-中-高を一貫した到達度基準に基づく英語教育が行なわれ、高等教育機関である大学の英語教育は、それらの成果を受け留め、さらに育てるものになっていかなければならず、改めて高等教育課程に相応しい到達度目標の設定が必要になってくることが想定される。そしてグローバル化への対応を考えた場合、この大学の到達目標は、CEFR等に通ずる国際的なものになっていなくてはならないであろう。大学センター試験の廃止が決定され、政府は「統一テスト」なるものを策定する準備に既に入っているという。しかし、外国語(英語)の4技能を統合したコミュニケーション能力を測定する独自のテスト開発は行わず、TOEFL、TOEIC、英検等の既存の外部試験の採用を進めようとしている。実施に至るまでには、公教育の指針たる学習指導要領の内容(言語レベル)との整合性の問題の解決、複数の外部試験の平準化の問題の解決、受験者の外部試験結果を受ける大学(学部・学科)側の入学を許可する基準設定に関する問題の解決等、喫緊に解決すべき問題は山積している。恐らくこれからの5年間で、グローバル化に対応できる大学(学部・学科)とそうでない大学(学部・学科)の棲み分けは確実に行われると考えられる。言語政策の観点から見ると、結果として3種類(段階)の大学のグループ分けが成されると考える。A群: グローバル化対応大学(教育の成果を国際基準で評価する)、B群: 準グローバル化対応大学(学部・学科の一部の教育の成果を国際基準で評価する)、C群: グローバル化対応を行わず、別の尺度で特色ある教育を行う大学。高校と予備校は、これまでの偏差値ではなく、大学の教育が国際基準で行われる大学か否かで、進路指導を行うことが想定される。グローバル化を見据えた、小・中・高の連携の上に立つ大学(学部・学科)としての英語教育到達度を大学の理念との関係性から策定しておくことはこの5年間であらゆるものを優先して取り組むべき重要課題であろうかと思う。

青山学院英語教育研究センターは、全国に先駆け、「青山学院4-4-4一貫制英語教育シラバス」を2002に策定しJACET(大学英語教育学会)等で発表を行った。また一貫制

英語教育に資する独自の英語教科書（SEED BOOKS: 全12巻（CD付））の開発に着手し、本年度最終巻である第12巻を完成させる運びとなった。第12巻（高等部3年生用）は青山スタンダード教育機構の協力を得て、大学教養課程の講義内容を英語で教授・学習できるCLIL（Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習）型の英語教科書となる予定である。また昨年度よりは、グローバル化への対応に鑑み、「青山学院4-4-4一貫制シラバス」（2002）のCEFR化対応（CAN-DOリストの作成）の準備を進めている。その成果は、2015年3月出版予定の『青山学院4-4-4一貫制英語教育構想』（青山学院140周年記念事業）の中で発表をする予定である。大学（学部・学科）はこの小一中一高を対象とした一貫制英語教育の成果を受ける形でグローバル化に対応する英語教育を行っていくことになる。また全国の中学校・高等学校でも同様の構造的な教育改革が今後進むことが想定される。よってこの後は、入試形態別の有無に拘わらず、行動中心主義に基づく英語教育を受けた中学生・高校生が自らの可能性を果たす場として大学に入学してくることになる。これからの大学の英語教育は、ICTの進捗も視野に入れながら、彼らの学習経験と培った言語能力を尊重し、さらに国際基準に育て上げるために、EGP（English for General Purposes）の強化のみならず、ESP（English for Specific/Special Purposes）さらに専門課程教育との連動を視野に入れたEAP（English for Academic Purposes）に寄与し、その成果を社会に向かって公表できるものに成長していくことが課題となっていくであろう。

最後に参考として、CEFRの日本語翻訳版（吉島・大橋、2004）を紹介する。最初の解説文は高木亜希子氏（教育人間科学部准教授：英語教育学）によるもの（2015年3月発表予定）である。

「CEFRのレベル設定は、横軸と縦軸の2方向から成されており、前者は能力レベル段階の記述で、後者は各レベル内の言語使用の広がりに関する記述である。言語活動の広範囲にわたる領域は、公的領域、私的領域、職業領域、教育領域の4つに分けられている。CEFRのレベル分けの大きな特徴は、言語に関する知識ではなく、言語能力について、学習者が目標言語を用いて何ができるのか、その行動がどの程度うまく遂行できるのかについて、CDS（Can-Do Statements）で記述されている点である。個別言語を超えて、様々な言語に共通して適用できる基準であるため、言語に固有の文法や語彙は排除されている。レベル設定にあたり、レベルを大きく3段階（A: 基礎段階の言語使用者、B: 自立した言語使用者、C: 熟達した言語使用者）に分け、それらをさらに2段階（A1-C 2）に区別し、6段階で提示している。」

---

「共通参照レベル：全体的な尺度」(参考：吉島・大橋、2004)

---

\* 熟達した言語使用者 (レベル：C2-C1)

---

C2：聞いたたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。

---

C1：いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現の用法をマスターしていることが伺える。

---

\* 自立した言語使用者 (レベル：B2-B1)

---

B2：自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやりとりができるくらい流暢かつ自然である。かなり広範な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。

---

B1：仕事、学校、娯楽で普段で会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。そのことばが話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べるができる。

---

\* 基礎段階の言語使用者 (レベル：A2-A1)

---

A2：ごく基本的な個人情報や家庭情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。

---

A1：具体的な要求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け舟を出してくれるなら簡単なやりとりをすることができる。

---

### 参考文献

1. O'Malley, J.M. and Chamot, A.U. 1990. Learning Strategies in Second Language Acquisition, C.U.P.
2. Oxford, R..1989. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know: New York: Newbury House.
3. Cohen, A.D. and E. Macaro (eds.) 2007. Language Learning Strategies, O.U.P.
4. Griffiths, C. (ed.) 2008. Lessons from Good Language Learners, C.U.P.
5. Council of Europe. 2001. Common European Framework of References for Languages: Learning, Teaching, Assessment, C.U.P.
6. 吉島茂・大橋理枝（他）訳・編、2004年、『外国語教育II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、東京：朝日出版社。
7. 木村松雄（編著）、2011年、『新版英語科教育法』学文社。
8. 矢野安剛・本名信行・木村松雄・木下正義（編著）、2011年、『英語教育学大系第2巻英語教育政策—世界の言語教育政策論をめぐる—』、大修館書店。
9. 木村松雄・遠藤健治、2010年3月、青山学院大学文学部「紀要」第51号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2009年）」
10. 木村松雄・遠藤健治、2011年3月、青山学院大学文学部「紀要」第52号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2010年）」
11. 木村松雄・遠藤健治、2012年3月、青山学院大学文学部「紀要」第53号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2011年）」
12. 木村松雄・遠藤健治、2013年3月、青山学院大学文学部「紀要」第54号、「TOEFL-ITPを用いた英語学力と学習ストラテジーから見た一般学生と帰国学生の相違に関する横断的研究（2012年）」
13. 木村松雄・遠藤健治、2011年1月、「青山スタンダード論集」第7号、「英語熟達度、英語学習方略、英語学習への意識に特化した経年的研究（2010年）」
14. 木村松雄・遠藤健治、2012年1月、「青山スタンダード論集」第8号、「TOEFL-ITP、SILL、英検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と言語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2012年）」
15. 木村松雄・遠藤健治、2013年1月、「青山スタンダード論集」第9号、「TOEFL-ITP、SILL、英検CAN-DO Listsを用いた英語熟達度と言語学習ストラテジー及び英語学習意識から見た入試形態別グループの経年的研究（2013年）」

付表1

項目	群	男性		女性		期間の主効果 ( $F_{(2,297)}$ )	性別の主効果 ( $F_{(1,297)}$ )
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1.英語ですでに知っていることと新しく学習したこととの関係を考える。	なし群	3.67	0.95	3.66	.96	1.415	.016
	短期群	3.43	1.62	3.46	1.02		
	長期群	3.36	1.21	3.41	1.00		
2.覚えやすいように文の中で新語を使う。	なし群	2.94	1.07	3.06	1.16	7.537***	.133
	短期群	4.29	0.76	3.75	1.15		
	長期群	3.00	1.34	3.18	1.17		
3.単語を覚えるために、新語の音とその単語のイメージや絵を結びつける。	なし群	3.54	1.24	3.73	1.14	.350	.859
	短期群	3.29	0.76	3.63	1.35		
	長期群	3.45	1.29	3.55	1.19		
4.単語が使われる場面を心に描いて新語を覚える。	なし群	3.28	1.29	3.40	1.18	.432	5.405*
	短期群	3.00	1.41	3.83	1.20		
	長期群	2.82	1.17	3.48	1.25		
5.新語を覚えるときには顔を使う。	なし群	2.65	1.32	2.95	1.27	.816	.139
	短期群	2.43	1.40	2.46	1.18		
	長期群	2.73	0.65	2.66	1.22		
6.新語を覚えるときに単語カードなどを使う。	なし群	2.43	1.49	2.99	1.36	.385	1.902
	短期群	2.57	1.51	2.71	1.40		
	長期群	2.27	1.42	2.68	1.52		
7.新語を身体で表現して覚える。	なし群	2.22	1.14	2.30	1.22	.662	.093
	短期群	2.00	1.15	2.13	1.23		
	長期群	2.64	1.29	2.23	1.05		
8.授業の復習をよくする。	なし群	3.07	1.18	3.32	1.04	.207	.331
	短期群	3.00	1.53	3.33	1.17		
	長期群	3.18	0.87	2.95	.96		
9.新語を覚えるときに、その語があった本のページ、黒板、標識などの位置を記憶しておく。	なし群	3.28	1.31	3.36	1.18	2.093	4.053*
	短期群	2.57	1.51	3.63	.97		
	長期群	2.73	1.56	3.00	1.29		
10.新語は数回書いたり言ったりする。	なし群	3.87	1.27	4.16	.98	.903	1.594
	短期群	4.14	1.21	4.26	1.01		
	長期群	3.64	1.36	4.00	1.06		
11.英語のネイティブ・スピーカーのように話すよう心掛ける。	なし群	3.70	1.16	3.99	1.03	3.157*	2.896
	短期群	4.33	0.82	4.29	.95		
	長期群	3.82	1.60	4.61	.75		
12.英語の発音練習をする。	なし群	3.63	1.23	3.95	1.04	1.458	2.771
	短期群	3.86	1.35	4.33	.96		
	長期群	3.45	1.51	3.70	1.11		
13.知っている単語をいろいろな文脈で使う。	なし群	3.54	0.91	3.39	1.04	1.185	.704
	短期群	4.00	0.58	3.33	.96		
	長期群	3.55	1.29	3.89	.92		
14.積極的に英語で会話を始める。	なし群	2.81	1.17	2.93	1.19	5.307**	.429
	短期群	3.43	0.98	3.58	1.25		
	長期群	3.36	1.36	3.55	1.27		
15.英語のラジオ・テレビ番組(NHK等)や英語の映画を見る。	なし群	3.41	1.28	3.82	1.20	6.868**	.811
	短期群	4.71	0.49	3.83	1.27		
	長期群	4.36	0.92	4.23	1.03		
16.英語で読み物を読むのが楽しい。	なし群	3.37	1.19	3.62	1.07	2.188	.059
	短期群	4.29	0.76	3.67	1.20		
	長期群	3.45	1.37	3.98	.98		
17.英語でメモ、メッセージ、手紙、報告を書く。	なし群	2.59	1.21	2.74	1.17	11.858***	.487
	短期群	3.71	1.11	3.79	1.02		
	長期群	3.27	1.49	3.52	1.23		
18.英語を読むとき、まずスキミング(通し読み)をしてから再び前に戻って注意深く読む。	なし群	3.00	1.20	3.11	1.24	1.808	.093
	短期群	2.71	1.38	2.67	1.09		
	長期群	3.45	1.44	3.18	1.08		
19.英語の新語に似た語を日本語の中に探す。	なし群	2.91	1.23	2.75	1.12	5.784**	3.238
	短期群	2.00	1.15	2.75	1.19		
	長期群	1.91	0.94	2.45	.95		
20.英語の中にパターンを見つけようとする。	なし群	3.80	0.92	3.40	1.08	5.654**	.485
	短期群	3.00	1.15	3.08	1.35		
	長期群	3.09	1.38	2.98	1.02		
21.難しい英単語は分解して、意味を知ろうとする。	なし群	3.48	1.22	3.65	1.10	1.420	4.635*
	短期群	2.71	1.70	3.54	1.41		
	長期群	3.18	1.25	3.64	1.22		
22.逐語訳(一語一語訳す)はしないよう心掛ける。	なし群	4.04	1.12	3.85	1.02	.273	.091
	短期群	4.14	1.46	4.04	1.27		
	長期群	3.64	1.29	4.11	1.06		

23. 読んだり聞いたりしたことを英語で要約する。	なし群	2.67	1.06	2.50	1.14	2.459	1.759
	短期群	3.29	1.38	2.79	1.10		
	長期群	3.00	1.18	2.82	1.04		
24. 知らない語を理解しようと推測する。	なし群	4.17	0.86	4.25	.76	.434	1.403
	短期群	4.29	0.76	4.46	.78		
	長期群	4.09	0.83	4.36	.72		
25. 英語での会話中、適切な語が思いつかないとき、ジェスチャーを使う。	なし群	3.81	0.95	4.10	.94	.215	1.610
	短期群	4.00	1.15	4.13	1.08		
	長期群	3.91	1.14	4.20	1.07		
26. 英語で適切な語が分からないとき、自分で新語を作る。	なし群	1.81	0.97	2.18	1.21	1.828	.165
	短期群	2.14	1.07	2.13	1.15		
	長期群	2.45	1.21	2.39	1.43		
27. 英語を読むとき、一語一語辞書で調べない。	なし群	3.80	1.11	3.74	1.05	.086	.810
	短期群	3.86	1.21	3.79	1.18		
	長期群	3.36	1.36	4.05	1.14		
28. 他の人が次に英語で何と言うかを推測しようと心掛ける。	なし群	2.91	1.13	2.91	1.16	1.833	.711
	短期群	3.43	0.98	3.25	1.29		
	長期群	2.82	1.17	3.55	1.15		
29. 英語の単語が思いつかないとき、同じ意味を持つ語や句を使う。	なし群	4.24	0.93	4.48	.69	1.907	1.114
	短期群	4.29	0.76	4.50	.93		
	長期群	4.64	0.92	4.64	.61		
30. いろいろな方法を見つけて英語を使うよう心掛ける。	なし群	3.52	1.00	3.65	.98	.760	.085
	短期群	4.00	0.82	3.63	1.13		
	長期群	3.27	1.27	3.68	.96		
31. 自分の英語の間違いに気づき、そこから学んで上達しようと努力する。	なし群	4.11	0.74	4.17	.75	.251	2.372
	短期群	4.00	1.15	4.46	.78		
	長期群	4.00	1.00	4.16	.78		
32. 他の人が英語を使っているときは、集中して聞く。	なし群	4.04	1.01	4.37	.78	2.455	7.025** 男性<女性
	短期群	4.14	0.69	4.33	1.01		
	長期群	3.45	1.44	4.25	.84		
33. 優れた英語学習者になるためにはどうしたらよいか心掛ける。	なし群	3.98	1.00	4.03	.87	.572	.003
	短期群	4.14	0.90	4.17	.96		
	長期群	3.91	1.04	3.86	.98		
34. スケジュールを立て、英語の学習に十分時間をあてる。	なし群	3.46	1.04	3.48	.98	3.256*	.135
	短期群	3.29	1.38	3.50	1.18		
	長期群	3.00	0.63	2.98	1.07		
35. 英語で話しかけることのできる人を探そう心掛ける。	なし群	3.06	1.29	3.25	1.21	2.436	.011
	短期群	4.14	0.90	3.38	1.35		
	長期群	3.09	1.14	3.59	1.24		
36. できるだけ英語で読む機会を探す。	なし群	3.37	1.17	3.75	1.04	1.484	.779
	短期群	4.14	0.90	3.83	1.17		
	長期群	3.36	0.92	3.84	1.16		
37. 英語の技能を高めるための明確な目標を持っている。	なし群	3.57	1.14	3.80	.97	3.603*	.847
	短期群	4.57	0.53	4.04	1.12		
	長期群	3.91	0.83	3.68	1.01		
38. 自分の英語学習の進歩について考える。	なし群	3.85	1.02	3.94	.94	1.601	.025
	短期群	4.29	1.11	4.25	.99		
	長期群	3.91	0.83	3.77	.94		
39. 英語を使うのに自信がないときは、いつもリラックスしよう心掛ける。	なし群	2.89	1.00	2.96	.98	1.766	2.254
	短期群	3.29	1.50	3.46	1.35		
	長期群	2.73	1.19	3.39	1.15		
40. 間違いを恐れずに英語を話すよう心掛ける。	なし群	3.09	1.15	3.16	1.14	4.176*	1.559
	短期群	3.00	1.15	3.75	1.07		
	長期群	3.73	0.79	3.70	1.07		
41. うまくいったとき、自分をほめる。	なし群	3.28	1.04	3.61	1.11	2.815	2.192
	短期群	3.57	1.51	3.54	1.25		
	長期群	2.64	1.12	3.30	1.29		
42. 英語を勉強しているときや使っているときに、緊張しているか神経質になっている自分に気づく。	なし群	3.26	1.26	3.11	1.31	3.640*	3.679
	短期群	4.14	1.46	3.00	1.47		
	長期群	2.73	1.62	2.59	1.19		
43. 英語が分からないとき、相手にゆっくり話してもらるか、もう一度言ってもらるかたのむ。	なし群	3.91	1.07	4.28	.85	5.231**	6.230*
	短期群	4.43	0.79	4.21	.66		
	長期群	3.00	1.61	4.18	1.02		
44. 話しているとき、英語のネイティブ・スピーカーに間違いを直してもらう。	なし群	2.83	1.18	3.20	1.21	1.011	4.592*
	短期群	2.86	1.57	3.50	1.22		
	長期群	3.09	1.51	3.57	1.19		
45. 他の人と英語を使う練習をよくする。	なし群	2.35	1.17	2.42	1.07	4.738**	.001
	短期群	2.71	1.11	2.92	1.14		
	長期群	3.09	1.64	2.84	1.08		

46.困ったとき、英語のネイティブ・スピーカーからの助けを求める。	なし群	2.76	1.32	2.94	1.25	.339	2.173
	短期群	2.86	1.35	3.29	1.37		
	長期群	2.73	1.42	3.18	1.28		
47.英語で質問をよくする。	なし群	2.22	0.98	2.43	1.13	2.492	1.031
	短期群	2.57	1.40	2.88	1.26		
	長期群	2.64	1.43	2.77	1.05		
48.英語話者の文化を学ぶよう心掛ける。	なし群	3.46	1.21	3.77	1.03	.814	.006
	短期群	4.29	0.76	3.54	1.22		
	長期群	3.55	0.69	3.93	1.13		
49.特定の日本人の英語の熟達者を意識している。	なし群	3.02	1.37	3.06	1.35	4.844**	.013
	短期群	4.00	0.82	3.96	1.27		
	長期群	3.00	1.41	3.09	1.33		
50.自分の英語学習において、音読は重要だと思う。	なし群	4.09	1.19	4.60	.74	5.565**	2.065
	短期群	4.71	0.49	4.54	.88		
	長期群	3.64	1.36	4.07	1.15		
51.辞書をよく引く。	なし群	3.76	1.16	3.86	1.04	2.302	.291
	短期群	3.71	1.38	3.38	.92		
	長期群	3.45	1.21	3.36	1.10		
52.自分で考えた英語ノートを活用する。	なし群	2.54	1.33	2.95	1.27	.390	.898
	短期群	2.57	0.79	3.04	1.37		
	長期群	2.64	1.36	2.45	1.41		
記憶ストラテジー	なし群	3.01	0.68	3.19	.54	.809	2.737
	短期群	2.95	0.63	3.21	.60		
	長期群	2.91	0.71	3.02	.61		
認知ストラテジー	なし群	3.34	0.59	3.42	.53	1.736	.954
	短期群	3.59	0.38	3.57	.57		
	長期群	3.37	0.70	3.62	.42		
補償ストラテジー	なし群	3.46	0.43	3.61	.57	1.952	2.774
	短期群	3.67	0.35	3.71	.57		
	長期群	3.55	0.61	3.86	.55		
メタ認知ストラテジー	なし群	3.66	0.76	3.83	.63	2.118	.445
	短期群	4.08	0.54	3.95	.72		
	長期群	3.55	0.70	3.76	.66		
情意ストラテジー	なし群	3.13	0.72	3.21	.74	1.844	.538
	短期群	3.50	0.76	3.44	.82		
	長期群	2.95	0.89	3.24	.71		
社会ストラテジー	なし群	2.92	0.78	3.17	.72	1.873	3.111
	短期群	3.29	0.78	3.39	.75		
	長期群	3.02	1.19	3.41	.68		
英語を日常場面で使用する	なし群	2.85	0.65	2.96	.68	8.655***	.038
	短期群	3.53	0.35	3.32	.72		
	長期群	3.17	0.93	3.35	.57		
自覚的英語学習態度	なし群	3.62	0.75	3.77	.61	1.644	.211
	短期群	3.93	0.53	3.90	.77		
	長期群	3.57	0.60	3.62	.66		
補償的態度	なし群	3.05	0.77	3.21	.78	2.448	2.395
	短期群	3.36	0.70	3.51	.82		
	長期群	3.18	0.79	3.55	.73		
単語記憶	なし群	3.15	0.97	3.36	.87	.552	2.642
	短期群	2.90	0.90	3.31	.91		
	長期群	3.00	0.91	3.23	.91		
神経質な英語学習態度	なし群	3.30	0.77	3.24	.73	1.605	.075
	短期群	3.33	1.07	3.19	.86		
	長期群	2.97	1.29	3.05	.77		
能動的英語学習態度	なし群	3.37	1.06	3.69	.91	2.266	.425
	短期群	4.21	0.76	3.75	1.04		
	長期群	3.41	1.00	3.91	.94		
概括的理解	なし群	3.92	0.86	3.79	.85	.239	.544
	短期群	4.00	0.82	3.92	1.01		
	長期群	3.50	1.14	4.08	.98		
能動的英語使用態度	なし群	3.03	0.65	3.12	.62	7.136***	.348
	短期群	3.57	0.47	3.44	.67		
	長期群	3.27	0.88	3.52	.54		
勉強的態度	なし群	3.59	0.67	3.73	.55	4.893**	.358
	短期群	3.71	0.52	3.72	.54		
	長期群	3.31	0.70	3.36	.56		

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001

付表2

項目	群	男性		女性		期間の主効果 (F <sub>(2,297)</sub> )	性別の主効果 (F <sub>(1,297)</sub> )
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
53.興味・関心のある話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(講演・講義など)	なし群	2.91	1.05	3.42	1.07	15.047***	.281
	短期群	3.43	0.53	3.50	1.14		
	長期群	4.36	0.92	4.09	.98		
54.テレビやラジオのニュース番組を聞いて、その要点を理解することができる。	なし群	2.81	1.07	3.21	1.05	11.036***	1.608
	短期群	3.14	1.07	3.46	1.14		
	長期群	3.91	0.83	3.95	1.06		
55.観光地や博物館などでガイドの説明を理解することができる。	なし群	2.93	1.08	3.36	1.09	11.741***	.087
	短期群	3.57	1.27	3.29	1.16		
	長期群	4.09	0.94	4.11	.92		
56.公共の施設や学校などで、簡単な指示や説明を聞いて、理解することができる。	なし群	3.36	1.00	3.79	.94	11.528***	2.989
	短期群	4.00	1.00	4.13	1.03		
	長期群	4.18	0.98	4.55	.76		
57.交通機関における指示や連絡事項を聞いて、理解することができる。	なし群	3.23	1.17	3.72	.93	11.460***	.482
	短期群	4.14	1.07	3.79	1.10		
	長期群	4.18	0.98	4.43	.87		
58.自分の仕事や専門分野の内容であれば、電話で注文や問合せを聞いて、理解することができる。	なし群	2.35	0.85	2.82	1.14	22.505***	.002
	短期群	3.29	1.50	3.00	1.35		
	長期群	4.00	0.77	3.84	1.01		
59.幅広い話題に関するまとまりのある話を理解することができる。(一般教養的な講演や講義など)	なし群	2.54	1.06	2.73	1.00	17.876***	.044
	短期群	2.71	0.95	2.92	1.32		
	長期群	3.91	0.83	3.64	.94		
60.社会的な話題に関する話を理解することができる。(環境問題に関する講演など)	なし群	2.39	0.96	2.73	1.12	15.250***	.070
	短期群	2.71	0.76	2.71	1.20		
	長期群	3.91	0.83	3.41	1.02		
61.会議に参加して、その内容を理解することができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.33	1.08	2.63	1.12	14.838***	.170
	短期群	2.71	1.11	2.75	1.29		
	長期群	3.64	0.81	3.57	1.04		
62.テレビやラジオの政治・経済的なニュースを理解することができる。	なし群	2.43	0.96	2.63	1.06	5.282**	.512
	短期群	2.43	1.13	2.54	1.14		
	長期群	3.09	0.70	3.20	1.11		
63.いろいろな種類のドラマや映画の内容を理解することができる。	なし群	3.02	1.24	3.45	1.05	8.134***	2.799
	短期群	3.00	1.29	3.50	1.29		
	長期群	4.00	1.00	4.11	1.02		
64.調べたことについて、まとまりのある話をすることができる。(課題の発表、プレゼンテーション)	なし群	2.76	1.10	2.75	1.07	5.790**	.172
	短期群	3.00	0.82	3.42	1.18		
	長期群	3.45	0.93	3.30	1.05		
65.自分の専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	なし群	2.56	1.00	2.58	.99	9.604***	.462
	短期群	2.71	1.11	3.25	1.26		
	長期群	3.45	1.04	3.30	1.07		
66.商品やサービスについて、苦情を言うことができる。(商品の故障、サービスの内容など)	なし群	2.35	0.91	2.28	1.10	14.256***	.612
	短期群	2.14	1.21	3.00	1.38		
	長期群	3.55	0.52	3.25	1.18		
67.公共の施設で簡単な用を足すことができる。(外国の郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)	なし群	2.70	1.02	3.11	1.23	23.431***	.178
	短期群	3.86	1.21	3.83	1.09		
	長期群	4.27	0.79	4.16	.89		
68.病院などで健康状態を伝えることができる。	なし群	2.83	1.11	3.07	1.20	12.232***	.107
	短期群	3.14	1.07	3.50	1.18		
	長期群	4.18	0.75	3.80	.95		
69.簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる。(歯医者や美容院の予約など)	なし群	2.78	1.11	3.12	1.22	17.611***	.020
	短期群	3.71	1.11	3.67	1.20		
	長期群	4.36	1.03	3.98	1.09		
70.読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べることができる。	なし群	2.70	0.98	2.84	1.11	15.235***	.233
	短期群	3.14	1.07	3.42	1.25		
	長期群	3.91	0.83	3.80	1.05		
71.社会的な話題や時事問題について、質問したり自分の考えを述べたりすることができる。	なし群	2.35	0.87	2.42	1.02	10.623***	.468
	短期群	2.71	0.76	2.83	1.31		
	長期群	3.55	0.82	2.95	1.16		
72.会議に参加してやりとりをすることができる。(イベントの打合せ、ミーティングなど)	なし群	2.13	0.99	2.28	1.05	17.304***	.283
	短期群	2.57	0.98	2.67	1.24		
	長期群	3.64	0.92	3.07	1.11		
73.幅広い内容について、電話で交渉することができる。(予定の変更、値段の交渉など)	なし群	2.15	0.94	2.22	1.12	16.052***	.074
	短期群	2.00	0.58	2.67	1.40		
	長期群	3.64	0.92	3.07	1.19		
74.相手や状況に応じて、丁寧な表現やくだけた表現を使い分けることができる。	なし群	2.43	1.07	2.61	1.21	14.668***	.007
	短期群	3.00	1.29	3.21	1.47		
	長期群	3.91	0.94	3.45	1.15		
75.英文の種類や読む目的に応じて、適切に読みこなすことができる。(新聞をさっと読む、評論文を注意深く読む、小説を楽しみながら読む)	なし群	3.30	0.94	3.18	1.05	2.990	.303
	短期群	3.71	1.38	3.46	1.22		
	長期群	3.64	1.12	3.68	1.01		

76. 英字新聞で社会的な出来事に関する記事を理解することができる。(The Japan Times/The Daily Yomiuri/The New York Timesなど)	なし群	2.96	0.97	2.87	1.06	6.153**	.481
	短期群	2.86	1.07	2.83	1.09		
	長期群	3.73	1.01	3.43	1.04		
77. まとまった量の英文の要点を理解することができる。(講義や研修での課題図書や資料など)	なし群	3.09	1.01	2.90	.93	5.671**	.632
	短期群	2.86	1.21	3.00	1.29		
	長期群	3.82	0.87	3.41	1.13		
78. 仕事に関する手紙(にメール)を理解することができる。	なし群	3.02	0.96	3.09	.97	5.750**	.055
	短期群	3.43	0.98	3.33	1.27		
	長期群	3.73	0.90	3.61	1.10		
79. 商品の取り扱い説明書を理解することができる。(電化製品など)	なし群	3.24	1.04	3.12	1.06	4.433*	.007
	短期群	3.14	1.07	3.08	1.18		
	長期群	3.64	0.81	3.86	1.05		
80. 雑誌の社会的、経済的、文化的な記事を理解することができる。(TIME/Newsweekなど)	なし群	2.85	0.94	3.09	1.00	4.239†	.156
	短期群	3.00	1.00	3.04	1.12		
	長期群	3.55	0.69	3.50	1.21		
81. 文学作品を理解することができる。(小説など)	なし群	2.78	0.86	3.13	1.04	4.098†	.012
	短期群	3.29	1.11	2.75	1.29		
	長期群	3.45	0.69	3.57	1.17		
82. 資料や年鑑などを読んで、必要な情報を得ることができる。(報告書、統計的な資料など)	なし群	2.67	0.89	2.77	1.00	7.247***	1.184
	短期群	3.29	0.76	2.83	1.09		
	長期群	3.55	0.69	3.27	1.21		
83. 留学や海外滞在などの手続きに必要な書類を理解することができる。	なし群	2.61	0.90	2.74	1.15	11.286***	.000
	短期群	3.29	0.95	3.38	.97		
	長期群	3.64	0.81	3.43	1.15		
84. 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる。(簡単なレシピ、器具の使い方など)	なし群	3.20	0.96	3.31	1.06	6.213**	.040
	短期群	3.71	1.25	3.54	1.22		
	長期群	3.82	0.98	4.00	.96		
85. 興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる。(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)	なし群	3.06	1.02	3.25	1.08	4.174†	.517
	短期群	3.33	1.21	3.67	1.24		
	長期群	3.73	1.01	3.66	1.01		
86. 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる。	なし群	3.41	0.98	3.56	.94	8.258***	.017
	短期群	4.14	0.69	3.83	1.13		
	長期群	4.00	0.89	4.23	.80		
87. 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど)	なし群	3.33	0.99	3.65	.89	2.894	.085
	短期群	3.86	1.07	3.83	1.09		
	長期群	3.91	0.94	3.77	.99		
88. 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる。(留学の志望動機など)	なし群	3.28	1.02	3.50	.93	2.760	.012
	短期群	4.00	1.00	3.58	1.14		
	長期群	3.64	0.67	3.77	1.08		
89. 自分の専門分野の内容であれば、注文や問合せに対して簡単な返事を書くことができる。	なし群	2.87	0.87	2.90	1.04	9.086***	.709
	短期群	3.71	1.11	3.21	1.35		
	長期群	3.64	0.92	3.61	1.04		
90. 社会的な話題について自分の意見をまとまりのある文章で書くことができる。(環境問題など)	なし群	2.87	0.93	2.83	1.02	2.317	.557
	短期群	3.29	0.76	3.08	1.25		
	長期群	3.27	0.65	3.09	1.01		
91. 自分の行った調査について、まとまりのある文章を書くことができる。(レポート、報告書など)	なし群	2.85	0.94	2.88	1.00	2.027	.183
	短期群	2.71	1.11	3.17	1.37		
	長期群	3.36	0.67	3.14	1.07		
92. 商品やサービスについて、苦情を申し立てる文章を書くことができる。(商品の故障、サービス内容など)	なし群	2.48	0.88	2.50	1.00	9.039***	.032
	短期群	2.14	1.21	2.46	1.14		
	長期群	3.36	0.50	3.14	1.21		
93. 社会的な話題に関する雑誌記事や新聞記事の要約を書くことができる。(社説や論文など)	なし群	2.59	0.84	2.61	.96	3.459†	1.201
	短期群	3.00	1.00	2.67	.92		
	長期群	3.18	0.60	2.91	1.05		
94. 講義や会議の要点のメモをとることができる。	なし群	2.81	0.92	3.00	1.10	6.794**	.183
	短期群	2.57	0.53	3.04	1.30		
	長期群	3.82	0.60	3.42	1.16		
Listening 準1級	なし群	2.91	0.85	3.39	.82	21.908***	.923
	短期群	3.60	0.53	3.53	.94		
	長期群	4.12	0.83	4.16	.79		
Listening 1級	なし群	2.54	0.87	2.83	.93	16.469***	.430
	短期群	2.71	0.91	2.88	.98		
	長期群	3.71	0.63	3.59	.85		
Listening Total	なし群	2.74	0.82	3.13	.82	20.846***	.731
	短期群	3.19	0.68	3.23	.92		
	長期群	3.93	0.73	3.90	.78		
Speaking 準1級	なし群	2.67	0.83	2.82	.91	21.011***	.270
	短期群	3.10	0.56	3.44	1.01		
	長期群	3.88	0.55	3.65	.84		
Speaking 1級	なし群	2.26	0.84	2.38	.92	19.521***	.081
	短期群	2.57	0.70	2.84	1.19		
	長期群	3.68	0.83	3.14	1.03		

Speaking Total	なし群	2.52	0.78	2.66	.89	なし<短期<長期	22.015***	.050
	短期群	2.91	0.57	3.22	1.04			
	長期群	3.81	0.63	3.46	.88			
Reading 準1級	なし群	3.12	0.82	3.03	.80	なし<短期, 長期	6.952**	.294
	短期群	3.20	0.68	3.14	.95			
	長期群	3.71	0.74	3.60	.93			
Reading 1 級	なし群	2.73	0.75	2.93	.84	なし<短期, 長期	9.101***	.054
	短期群	3.21	0.81	3.00	.88			
	長期群	3.55	0.49	3.44	1.07			
Reading Total	なし群	2.95	0.75	2.99	.77	なし<短期, 長期	8.790***	.182
	短期群	3.21	0.53	3.08	.85			
	長期群	3.64	0.59	3.53	.97			
Writing 準1級	なし群	3.19	0.83	3.36	.81	なし<長期	7.656***	.004
	短期群	3.80	0.78	3.61	1.01			
	長期群	3.79	0.73	3.84	.82			
Writing 1 級	なし群	2.72	0.73	2.76	.84	なし<長期	5.709**	.039
	短期群	2.74	0.60	2.88	1.03			
	長期群	3.40	0.45	3.14	.97			
Writing Total	なし群	2.98	0.74	3.09	.78	なし<長期	7.037**	.001
	短期群	3.32	0.64	3.28	.96			
	長期群	3.61	0.54	3.52	.85			

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001